

「あまくて、すずなり！ミニトマト生産に奮闘」

就農して8年。人とのつながりを大切に、真摯にマイペースに農業に取り組む。

有田 真也さん（35歳）（神戸市中央区）

就農コース9期生（H24年8月修了）

インタビュー 令和3年10月

1 なぜ、農業をしようと思ったか

大学4年生の時に精神的にしんどくなり中退したのをきっかけに、3年ほど引きこもっている時期があった。そんな時、生きがい農業コースに参加していた父に勧められ共に野菜づくりをはじめると、作物を育てることの楽しさなど農業への関心が芽生え、早々に就農コースを受講することにした。



とは言え、本格的に就農しようという積極的な思いが最初からあったわけではなかった。しかし、就農コースでの1年間の研修では、Oさん、Mさんと仲良くなり気の合う仲間にも恵まれ、精神的にも身体的にも健康になれた気がする。しかし、栽培はなかなかうまくいかなかった。生産から販売することの難しさ、農業の奥深さを知った。

2 就農後の取組み

青年就農給付金を受給していたので就農コース終了後は学校課の指導員に相談しながら農地バンクで農地を探し、10月に農地を借りてから親の支援でハウスを建て、就農コースを終了した翌年の5月春には最初のトマトを定植し農業経営を開始した。両親の協力を得ながら施設貸与事業も活用して、施設を増設し、設備を整備した。最初は、大玉とミディトマトを栽培したが大玉トマトは競争相手が多くミニトマトとミディトマトに切り替え、農業経営を軌道に乗せてきた。

現在は、神戸市西区押部谷町細田で、ビニールハウス約1300㎡（4棟）を活用し、養液土耕によるミニトマトとミディトマトを栽培（8月上旬定植し、10月～1月まで収穫する半促成栽培と、2月中旬に定植し4月～7月上旬まで収穫する抑制栽培）している。



就農コースで実践したコの字パイプと誘引クリップで仕立てる方法で栽培し、同じく就農コースの実習で身に付けた育苗技術により苗は自分で接ぎ木し全て自家生産している。

毎年数種類の品種を試作しながらより良い品種を選定したり、肥培管理などの栽培管理について日々試行錯誤しながら、品質(味)も収量も向上できるように努めている。

スーパーや直売所を中心に出荷しており、多い時には1日に300~400袋の荷造りとなる。ミニトマトは収穫・調整作業に労力がかかるため、選果機や袋詰め機を導入し省力化を図っている。

来年にはビニールハウスを更に約700㎡増設し、ミニトマトの周年栽培に取り組む計画である。

就農して8年、今後は雇用導入を視野に入れた規模拡大に向けてステップアップを図っていきたい。



有田農園ホームページより

3 農業に取り組んで

人との関わりが得意だったわけではないのに、様々な情報収集のためにも人とのつながりが不可欠だと思い、農業経営を開始してすぐに農業青年クラブや養液土耕研究会、JA兵庫六甲の青壮年部等に所属し、神戸農業改良普及センターの研修会にも参加した。地域内外の農業者や関係機関の知り合いが増え、技術や経営などの向上につながっている。令和3年度からは兵庫県農業青年クラブ連絡協議会の役員をじゃんけんに負けて引き受け、その後、会長に就任した。

農業は自分の責任で自分のペースで仕事ができる一方で、地域内または農業関係の人同士のつながりが大切であり、そんな農業の仕事(農業界(社会))が自分には向いていたのかもしれない。

これからも、気の合う仲間と、楽しみながら仕事ができるようがんばっていきたい。